

多様性が実現する保育の場にはどのようなことが必要なのでしょうか



島本一男氏より提供

- ・「違うこと」をおおらかに受け止める子どもたちが育つ保育環境とはどのようなものなのでしょうか？
- ・多様な背景や感性をもった子どもたちが交わることにはどんな良さがありますか？
- ・多様であることと、一律に揃えることの間に葛藤はありますか？

この絵は運動会の1週間ほど前、4歳児が6～8人で大きな紙（450mm×1200mm）を囲んで自由にそれぞれが楽しいと感じていることを自由に表現した絵です。この中に茶色い塊がありますが、実は発達ゆっくりした子の表現です。保育者が何を描いているのか聞くと「ウン○」という答えが返ってきました。すると他の子が「やだ、そんなの描かないでよ」「くさい」などと笑いながら言ったそうですが、それでも本人は嬉しそうに描き続けました。運動会とは関係ない、今その子が持っている精一杯の力で描いていた「ウン○」の表現に対して、「いやだ」と言いながらも、笑いながら一緒に描いていたそうです。これは子ども同士の穏やかな関係性の中から生まれてきた表現ですが、「違うこと」をおおらかに受け止めることができる子どもたちの中から生まれた環境です。さらに、その表現を否定しない保育者のおおらかさも影響して生まれた絵であり、どの子にとっても至福の時間となったはずです。